

あれから50年の東大安田講堂で医療と介護の未来を語る！

🕒 2019年01月18日 06:20

🗨️ [2コメント](#)



2019年1月12日、東京大学安田講堂で「2019団塊・君たち・未来」という変わった名前のシンポジウムが開かれた。NPO在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワークと地域医療研究会の合同大会のプレ大会であるが、「50年前に安田講堂であったこと」を強く意識した集いでもあった。

50年前、すなわち1969年1月18、19日にこの場所で何があったか、即答できる人は今や少数派だろう。全共闘や新左翼の学生・市民がキャンパスを封鎖、解除を目指す機動隊との間でいわゆる安田講堂攻防戦を戦った日なのである。

シンポジウムには、かつてここに立てこもった元闘士を含め、さまざまな領域、年齢、思想の"活動家"が集まり、地域包括ケア、高齢者の貧困、医学部と女性差別、外国人医療、老いを病気として捉える歪みなどの問題を討議した。問題意識は多彩だが、どの発表も「50年後の安田講堂

に自分がいること」、時代の流れと自らの立ち位置を意識した興味深い内容となった。

地域医療、在宅医療は社会運動だった

なぜ、在宅医療のシンポジウムが安田講堂50年にこだわるのか。そこには大きく2つの理由がありそうだ。1つは、地域医療、在宅医療の歴史と全共闘世代の深いつながりである。第3部の座長を務めた黒岩卓夫氏（医療法人萌気会）は、1960年6月15日、全学連による国会突入時に重傷を負った1つ前の世代だが、その間の経緯を次のように語る。



黒岩 卓夫氏

《60年安保闘争、そして全共闘闘争の終わりから、一人二人と首都を去り、全国に散って、ささやかではあっても医療のそれぞれの拠点をつくった。ここから各地で地域医療が動きはじめた。1980年こうした拠点をつくった同志たちが集まって、「地域医療研究会」がつくられた。さらに病院からの地域医療づくりに限界を感じ、クリニックで孤軍奮闘をしていた者たちによって、「在宅ケアを支える診療所・市民ネットワーク」がつくられた。》

そうした動きの中心にいたのが、他ならぬ黒岩氏だ。彼は1970年に新潟県大和町（現・南魚沼市）の国保診療所に赴任。76年にはこれを病院とし、町立ゆきぐに大和総合病院を建設。保険・医療・福祉を一体化した地域医療は「大和方式」として全国に知られるようになる。

忘れてならないのは、同氏も名前を挙げた故・今井澄氏である。今井氏は、実は安田講堂攻防戦の防衛隊長であった。逮捕、約1年間の勾留の末、復学して医師となり、公立諏訪中央病院（長野県）に赴任した。この病院にほんの数カ月早く来ていたのが、第3部で講演を任された鎌田實氏（諏訪中央病院名誉院長）だ。その話では、当時の医師会は「すごい活動家 comes」と戦々恐々、なかなか着任できなかったという。その後、2人で手分けして公民館での脳卒中予防講演会などを精力的に行い、健康づくり運動や在宅ケアの充実を推進した。今井氏は同院の院長を務めたあと参議院議員になり、介護保険制度の生みの親とも呼ばれる貢献を果たしたのである。

すなわち、辺境の病院はアカデミズムを嫌い、あるいはアカデミアから忌避された医療者を受け入れた。こうした人々の実行力と組織力に富む活躍により地域医療は進化し、地域に根ざした在宅医療を展開するようになったのである。

NPO在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク会長の苛原実氏は、「安心して子育てができ、老いても障がいがあっても自分らしく暮らすことができる地域コミュニティの創造」の理念を掲げる同ネットワークは、地域を変える社会運動をしてきたのだと要約している。

団塊世代の取扱説明書

在宅医療のシンポジウムが安田講堂50年にこだわる、もう1つの理由は2025年問題だ。安田講堂に象徴される世代は、全共闘世代、団塊の世代と呼ばれる。中心は1947～49年に生まれた人々で、約700万人と日本の人口構成比において突出した存在である。戦後社会を牽引し、あらゆる場所に巨大な足跡を残した団塊世代という"蛮族"が一斉に後期高齢者になり、医療や介護のニーズ、費用の急増を引き起こすのが2025年問題である。これは深刻な問題であり、医療や介護の提供側がどう対応するかが問われている。

シンポジウムの実行委員長を務めた堂垂伸治氏（千葉県松戸市・どうたれ内科診療所）は1948年生まれの団塊世代で、東大工学部で闘争に参加。自動車会社の下請け工場で肉体労働に従事したあと、千葉大学医学部に再入学した経歴を持つ。

同氏は、自分たちが若いころ、第二次大戦を止められなかった親世代を批判したように、「私たちには若い世代に対する責任があり、追及される余地がある」と語る。年金、医療費、介護費などの社会保障費で、大きな負担を強いることを申し訳ないと感じている。しかし、それを世代間対立に短絡させてはならないという。国家を統治するものの常套手段は「国民の分断」であるからだ。今回のテーマ



苛原 実氏



鎌田 實氏



堂垂 伸治氏

「団塊・君たち・未来」は、「その後の50年を生き抜いてきた団塊世代」が生き様や思いを語り、「君たちの世代」と交流、連帯し、「未来につなぐ発信の場」にしたいとの思いを込めたものである。

とはいえ、同氏は「皆様が大変になるだろう」と述べ、団塊世代の「取り扱い説明書」と「私たちの遺言」を提示。団塊の世代からの贈り物とした。

表. 団塊世代の「取り扱い説明書」と「私たちの遺言」

1	私たちの世代は議論好きだが、納得すると意外に素直に従う。根気よく付き合い、「説明と納得」を目指してほしい。
2	私たちには厳しい競争社会を生き抜いてきた自負がある。軽蔑や侮辱は我慢できない。赤ちゃん言葉や「おじいちゃん」「おばあちゃん」といった呼びかけは慎んで。
3	正しい接し方は、「尊厳を守る」「感情を害さない」「卑下しない」「差別しない」こと。これは、認知症の人への正しい接し方と同じである。
4	とはいえ、老化による難聴や理解力低下は避け難い。言葉だけでなく、紙に書いた説明も活用してほしい。私たちは"文通"世代でもある。
5	私たちの若いころに比べ、最近は管理や監視で寛容さが失われ、窮屈な社会になった。日本は「身の丈にあった成長」を求めるべきではないか。
6	「働き方改革」が叫ばれるが、「ゆとり教育」と同じ運命をたどるのではないか。私たちの多くは朝から晩まで働かないとやっていけない。
7	私たちは「戦後民主主義」の中で育ち、それすら疑って本質を求めた世代。社会貢献意識を持つ人は多いので、有効に活用してほしい。
8	今や、世界各国でナショナリズムが異常に強まっているが、国民同士が直接交流すれば必ず仲良くなれる。グローバリズムでなく、私たちが若いころ目指したインターナショナリズムの概念を見つめ直してほしい。
9	結果としてではあるが、私たちは日本史上例のない長期の平和を成し遂げた。医療や福祉は平和な社会があってこそ。ぜひ、平和を作り上げてほしい。

堂垂伸治氏（編集部が整理）

関連タグ

◆[一般内科](#) ◆[老年病](#) ◆[社会医学](#) ◆[その他](#) ◆[予防医学](#) ◆[介護](#) ◆[医療制度・医療行政](#) ◆[老年医学](#)